

研究紀要・年報

# 縄文の森から

From JOMON NO MORI

第2号

石清水型削器小考  
桑波田 武志

南九州貝殻文系土器に見られる地域性について  
黒川 忠広

田村式土器とその周辺 (覚書)  
横手 浩二郎

上野原遺跡第10地点における石材選択について  
八木澤 一郎

「成川式土器」の器種組成について (予察)  
—杯形土器の様相を中心に—  
相美 伊久雄

古代官衙の立地  
—古代の官衙は、鹿児島ではどのようなところに置かれたか—  
繁昌 正幸

鹿児島県における荘園遺跡研究の現状  
中村 和美

鹿児島県における古代の鍛冶遺構について  
川口 雅之

墨書土器の性格  
—鹿児島を例として—  
坂本 佳代子・岩澤 和徳・松田 朝由

鹿児島県における中世煮炊具の様相  
上床 真

島津本家における近世大名墓の形成と特質  
松田 朝由

溝状遺構の一性格  
東 和幸

《実践報告》 出土木製品保存処理の現状と課題  
永濱 功治

平成14年度 埋文センター年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2004. 3

## 『縄文の森から』第2号 目次

---

石清水型削器小考	桑波田武志 ……………	1
南九州貝殻文系土器に見られる地域性について	黒川 忠広 ……………	11
田村式土器とその周辺 (覚書)	横手浩二郎 ……………	19
上野原遺跡第10地点における石材選択について	八木澤一郎 ……………	23
「成川式土器」の器種組成について (予察)	相美伊久雄 ……………	29
古代官衙の立地	繁昌 正幸 ……………	37
鹿児島県における荘園遺跡研究の現状	中村 和美 ……………	55
鹿児島県における古代の鍛冶遺構について	川口 雅之 ……………	63
墨書土器の性格	坂本佳代子・岩澤和徳・松田朝由 ……………	71
鹿児島県における中世煮炊具の一樣相	上床 真 ……………	81
島津本家における近世大名墓の形成と特質	松田 朝由 ……………	91
溝状遺構の一性格	東 和幸 ……………	109
《実践報告》出土木製品保存処理の現状と課題	永濱 功治 ……………	117
平成14年度 年報 ……………		121

---

# 研究紀要

# 鹿児島県における中世煮炊具の一様相

上 床 真

An Aspect of Vessels to Boil or Stew with of the Middle Ages in Kagoshima Prefecture

Uwatoko Makoto

## 要旨

中世における西日本の煮炊具は土製煮炊具が中心であったとされている。また、九州では滑石製石鍋が盛行するが、やはり基本的には土製煮炊具が中心であると考えられている。一方、鹿児島県では鉄鍋がみられないということと土製煮炊具があまりみられないことは以前から指摘されていた。本稿では、遺物の集成を行った結果、石鍋出土遺跡数に対して圧倒的に資料数が少ないことが確認できた。さらに、中世後半期に鉄製煮炊具が流通していた可能性についても検討をおこなった。

キーワード 中世 土製煮炊具 滑石製煮炊具(石鍋) 鉄製煮炊具

## 1 はじめに

近年、中世の考古資料が鹿児島県内でも注目されている。これは日置郡金峰町持鉢松遺跡の調査成果が発端であるといえよう。この遺跡は全国的にも注目され、1999年12月には日置郡金峰町主催で、『万之瀬川から見える日本・東アジア-阿多忠景と海の道-』というテーマのシンポジウムが開催された。また、『古代文化』の2003年2月号・3月号では「11～15世紀における南九州の歴史的展開-万之瀬川下流域に見る交易・支配・宗教-」のテーマで特集が生まれ、様々な観点からの議論が展開された。

しかしながら、鹿児島県の中世考古学研究は、北部九州などでの研究成果を参考にして調査・研究が行われているというのが実状である。遺構・遺物に関する研究も県内独自の研究は少ない。

これらの研究の対象をみてもつばら碗・皿などの食膳具に関する研究が多く、煮炊具に関するものはほとんどない。また、特に中世前半の九州では鉄製・土製よりも滑石製の煮炊具のほうが主を占めている。その中でも本県を含む中部九州以南は特に鉄製・土製の煮炊具の割合が低い地域であるといわれている。そこで本稿では鹿児島県内で出土している土製の煮炊具について集成を行い、土製の煮炊具をとりまく問題点について考察を加えてみたい。

## 2 研究の現状

縄文時代から古代にいたるまで遺物研究の中心といえは土器であり、その中でも特に煮炊具の編年研究が中心となっているのが現状である。翻って中世について目を向けると、中世の煮炊具(鍋・釜)に関する研究は実は

それほど多くない。筆者が目にするのができた範囲では、九州の中世煮炊具に関する研究は次のものがあつた。山村信榮による大宰府出土の瓦質土器に関する研究(山1990)、徳永貞紹による肥前の在地土器の研究(徳永1990)、谷口俊治による豊前地域の中世雑器の研究(谷口1990)などである。また、煮炊具を主として論じたものではないが、佐藤重聖による鹿児島出土の瓦質土器についての研究(佐藤2001)もある。これらの研究では編年研究を中心としたものが多く、それぞれが非常に興味深いものである。また、いずれも中世の土製煮炊具は資料数が少なく、更なる資料数の増加と研究の進展に期待する旨が示されている。遺跡での残存状況からみれば陶磁器・土器器皿は他の遺物に比較して圧倒的に多く出土し、煮炊具の割合は低いというのが博多や一乗谷・草戸千軒などの調査成果から明らかである(小野1997、宇野2001など)。しかしながら中世の生活のありかたを考えるうえで煮炊具の様相を明らかにすることは必要な作業である。

ところで、九州における中世の煮炊具は滑石製石鍋が主を占めていたことを上述したが、本県でも滑石製石鍋は多く出土し、いくつかの研究がみられる(栗林1994など)。ただし、完全な形で残っているものは少なく、破損した後の転用品として遺跡から出土する場合がほとんどである。このことが理由であるかどうかは定かではないが、研究対象としては煮炊具として独立して扱われることは意外に少なく、滑石の流通の問題として扱われることなどが多い。

これらの研究の現状から純粋に煮炊具に関する研究は多くはないこと、土製煮炊具の出土数が少ないこと、土製煮炊具と滑石製石鍋との関係などが明らかになって

いないことがおおよそ理解される。

次に県内の出土資料の現状についてみていくこととしたい。

### 3 中世前半期から近世にかけての状況

金子健一は土製煮炊具の分類を行うにあたって、「基本的には共伴する山茶碗や施釉陶器の年代観」を重視している(金子 2000)。

これを参考にして県内資料をみると、遺構内一括などの共伴資料はほとんどみられず、年代観についてはおおよそでしか把握することができない。これまでの資料をみる限り、同一包含層や近くで出土した遺物との年代を参考にし、かつ他地域との比較でおおよその年代観でとらえるしかないようである。

ここでは中世を南北朝時代頃の 14 世紀中頃を画期として、前半期と後半期において論をすすめていくこととする。また、煮炊具の変遷を考えるため近世についても触れることとする。

#### (1) 中世前半期

中世前半期の煮炊具には、土製のものとしては鍋と羽釜が、石製のものとしては滑石製羽釜がある。

県内の土製鍋は、有明町長田遺跡のものがある。報告書によれば、器面調整は「口縁部内外面はヨコナデ、内面口縁直下から頸部にかけてと、外面胴部下位はハケ目調整、胴部内面は工具ナデ、頸部内面から胴部上位にかけて指頭によるナデである。」と記されている。土坑墓の副葬品として玉縁口縁の白磁碗とともに出土している(有明町教育委員会 2003)。

県内の土製羽釜の中で中世前半期の可能性が高いものは、川内市成岡遺跡と薩摩町宮ノ前遺跡・川内市城下遺跡での出土例がある。鹿児島県内ではこれ以前の羽釜形の煮炊具は滑石製羽釜以外にはない。県内の土製羽釜で

はもっとも古い部類のものといえるだろう。

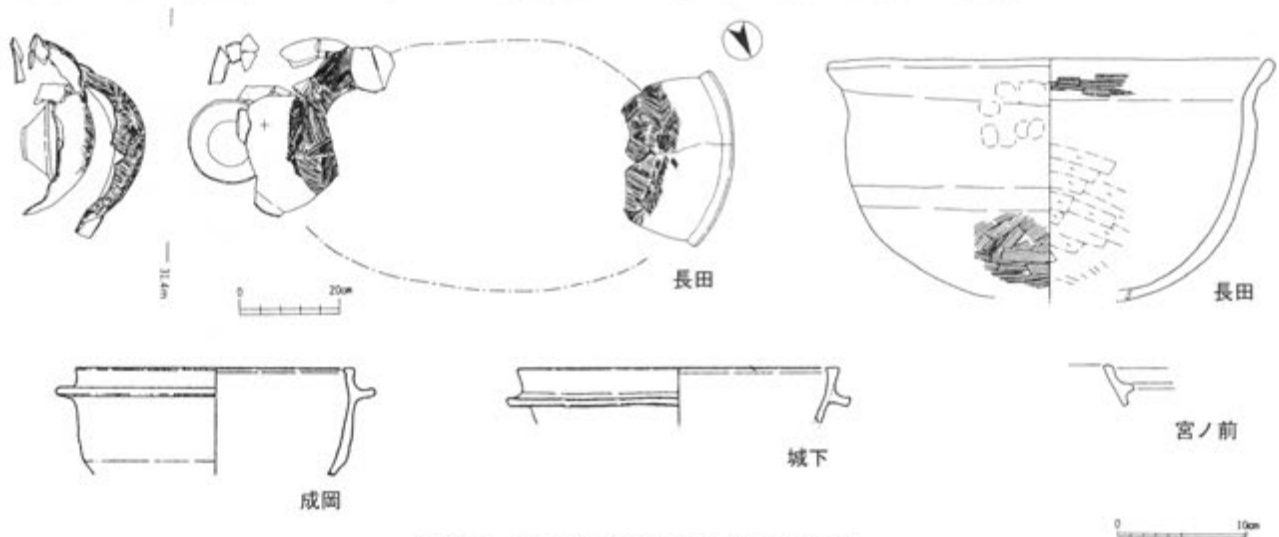
これらの羽釜は、3点ともに土師質の焼成で色調は白色に近いものである。また、銜部分が後の瓦質の羽釜に比べて口縁部に近い高い位置にあることが特徴である。この中で、特に宮ノ前遺跡出土のものは、同遺跡で古瀬戸の卸皿が出土していることから、報告者が瀬戸との関係を考えており、注目される。

滑石製石鍋については、上述のように栗林文夫による研究がある(栗林 1994)。栗林によれば、「鹿児島県内から出土した石鍋は、10 世紀末から 16 世紀初までの広がりを持つ。」という。ただし、「大部分は、台形状に張り出す銜を特徴とするもので、12 世紀から 13 世紀に編年されるものである。従って、鹿児島県内から出土する石鍋の中心的年代は、12 世紀から 13 世紀までの中世前期であったと結論」づけている。また、分布が「中世において有力な在地領主や国術・国分寺・一宮等の所在する地域に集中して」いることから、大筋として「経済的にもかなり富裕な人々が使用していたもの」と考えている。

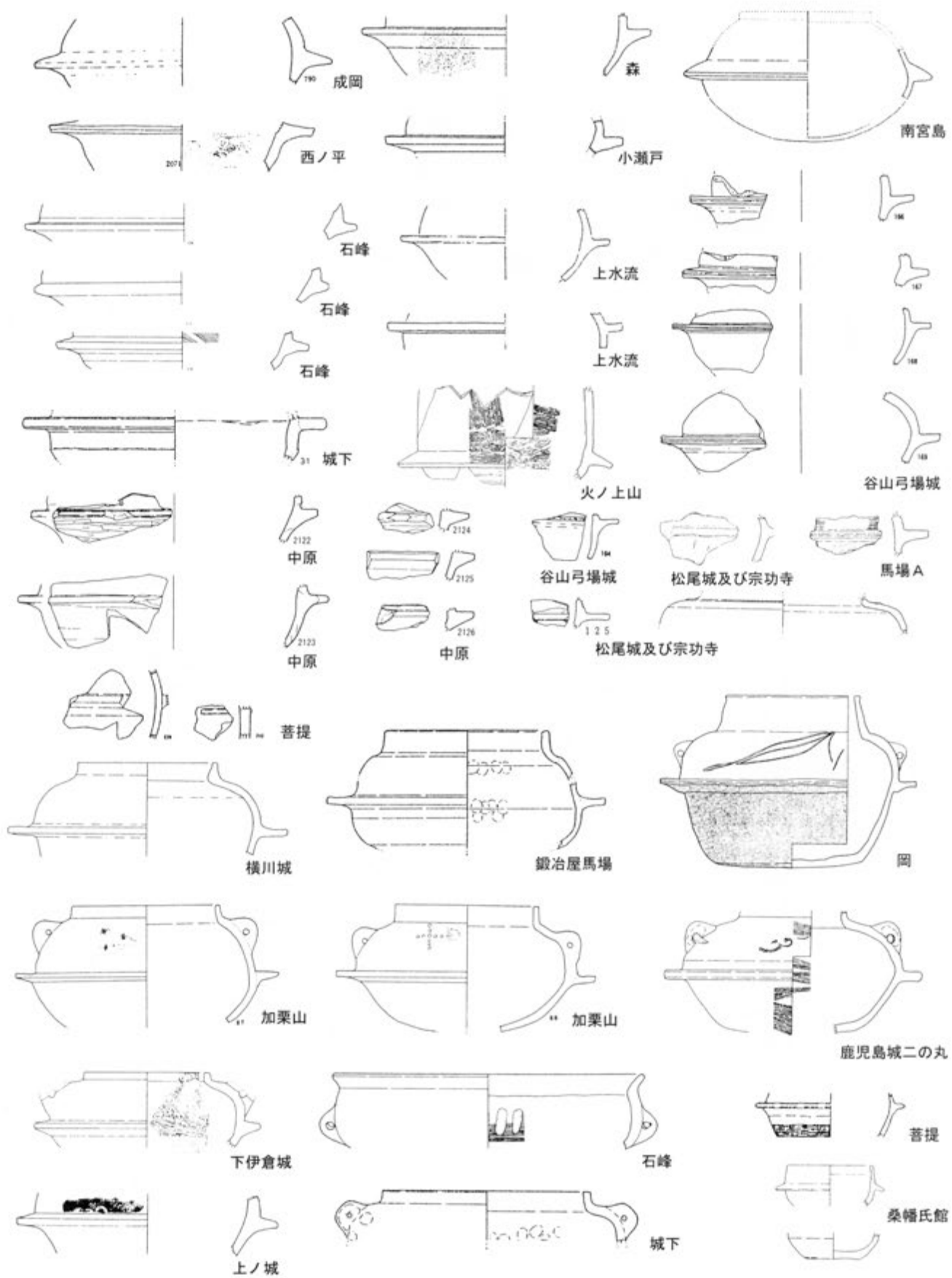
言い換えるならば、一般の人々が日常的に使用していた煮炊具の様相は明らかでないといえるであろう。

#### (2) 中世後半期

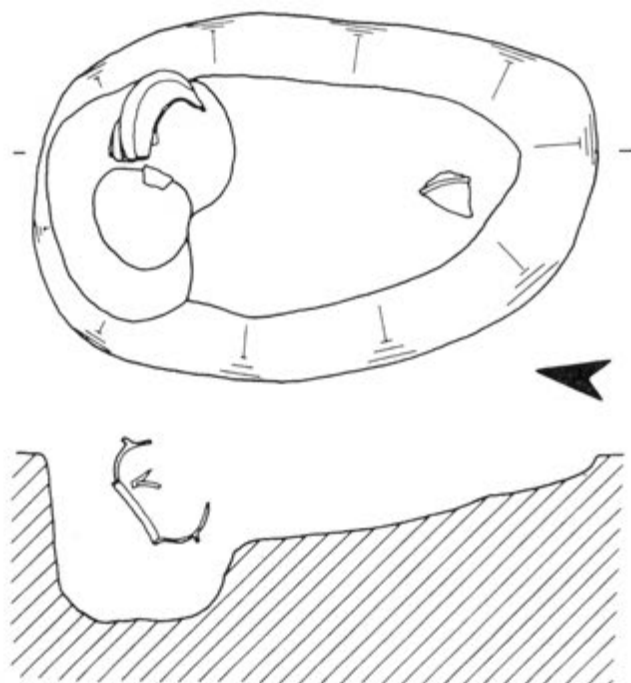
中世後半期には、それまでみられた滑石製羽釜は衰退し、瓦質土器の羽釜が出現する。肩部が角張ったものや、茶釜形のものもみられるようになる。茶釜形の土製煮炊具は、鹿児島市加栗山遺跡や東串良町下伊倉城跡などの城郭関連遺跡からの出土が多いようである。この事実から城との関連が想定される。しかしながら、鹿児島県内においては中世後半から近世初頭の遺跡の中での城郭関連遺跡の割合が非常に高く、集落遺跡の調査事例が圧倒的に少ない。現状では、土製煮炊具が出土する遺跡の位置づけは困難であるといえよう。



第1図 中世前半期の土製煮炊具 (S=1/6)



第2図 中世後半期以降の土製煮炊具 (S=1/6)



第3図 加栗山遺跡での出土状況 (S=1/30)

この時期に、他地域で生産された瓦質土器には、様相が明らかになっているものがいくつかある。特に、大和系瓦質土器はこの時期では代表的なものの一つで、上述のように、佐藤亜星は鹿児島県内から出土した瓦質土器との差異について比較を行っている(佐藤 2001)。佐藤によるとそれらの差異については、「鹿児島県内の瓦質土器をみると、胎土が土師質でイブシ不良のものが多く・ヘラミガキそのものを施さないものも多数ある・突帯貼り付け前の割付線を持つものが見られない・スタンプに規則性が乏しい」などの特徴がみられるという。また、「他地域と異なり大和のものを強く模倣しようという意識や、大和の工人との技術的交流はみられない」と述べている。すべての資料を実見したわけではないので、断定はできないが、筆者が今回実見した範囲では佐藤氏の指摘を支持したい。鹿児島県内出土の瓦質土器の中でも特に煮炊具をみると、ほぼすべてのものが地元で製作されたと考えたい。

なお、注目すべき遺構としては加栗山遺跡でカマド状炉跡内から土製煮炊具が出土している。煮炊具の使用のありかたを考えるうえで重要な資料といえよう。

### (3) 近世(安土桃山時代・江戸時代)

近世に入っても、鹿児島城のような城郭関連遺跡から出土例がみられる<sup>1)</sup>。ここでも、羽釜形・茶釜形などがみられるが、江戸時代以降になるとこの2つのほかにも陶製の羽釜・小形羽釜(鹿児島市一之宮遺跡・川内市薩摩国分寺跡など)もみられるようになる。

各報告書では、この陶製の羽釜・小形羽釜について明

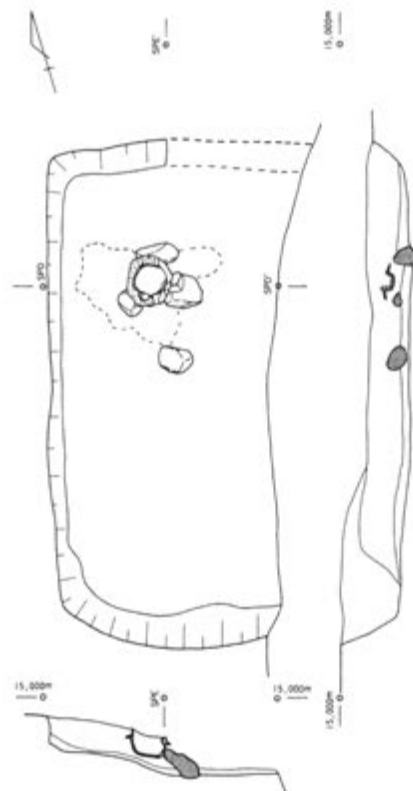
確な説明はなされていない。『図説 江戸考古学研究事典』(江戸遺跡研究会編 2001)によると、「稀に陶製羽釜と思われる破片が検出されることがあるが、帰属時期を含めて、詳細は明らかではない」とある。また、直径10cmほどのものは釜形土製品とし、「一般には茶釜や羽釜を模したままごと道具であると考えられている。しかし、受口皿のような灯火具の一種とみなされるほか、文献資料などによって祭具とする見解もある」とされており、すべて同一の用途のものかははっきりしていない。

鹿児島県十島村諏訪之瀬島切石遺跡では、近世の竪穴遺構内から金属製羽釜が出土している。県内唯一の例である。3個の大石を使用した石組み炉に据えられた状態で発見された。使用された状態で埋まったものであろう<sup>2)</sup>。

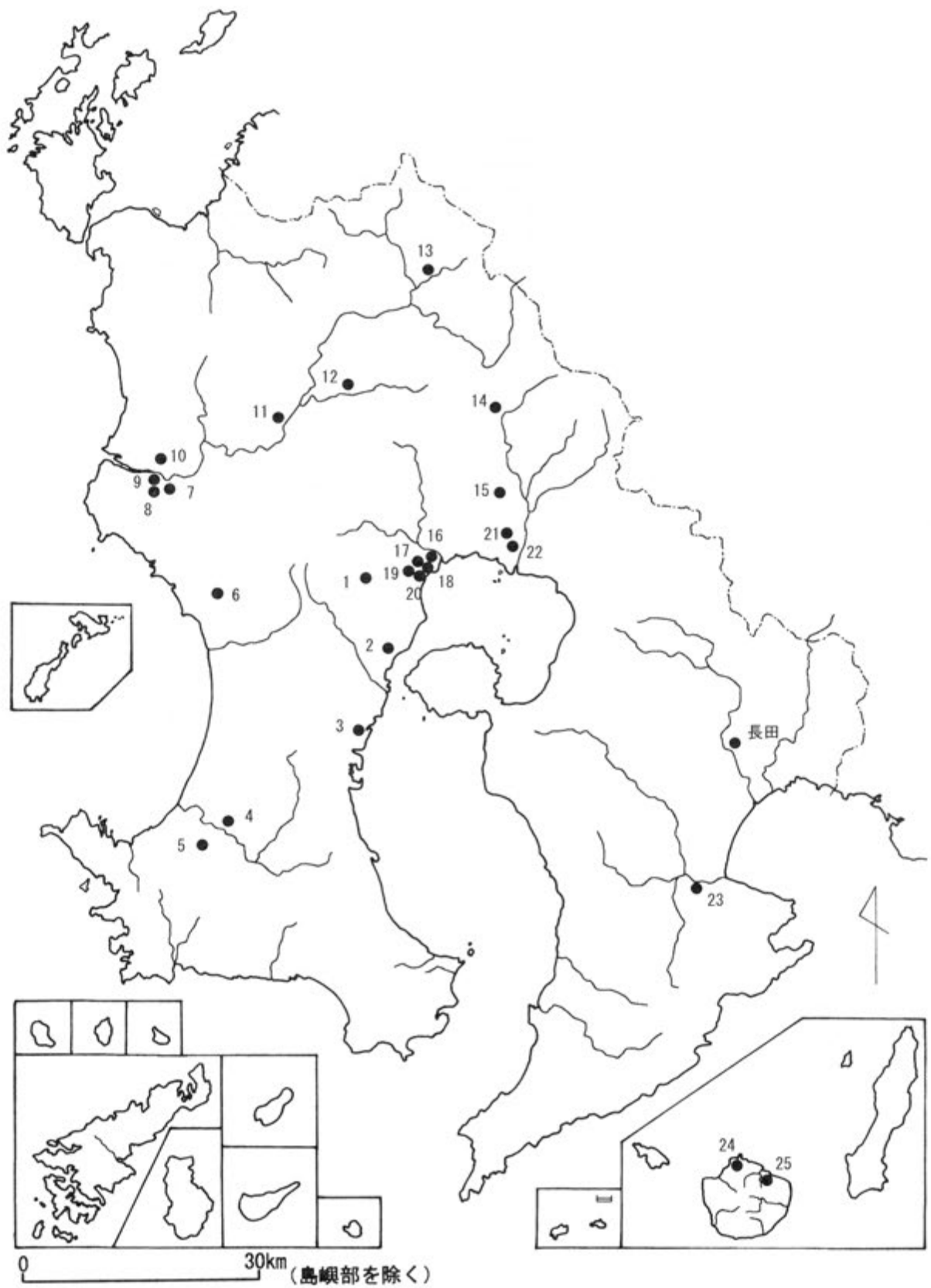
以上のように、おおよそ中世前半期・中世後半期・近世と3時期に区分して論を進めたが、実は中世後半以降というだけで時期のはっきりしないものが半数以上である(横川城跡・下伊倉城跡・火ノ上山遺跡など)。

南島については、多くの遺跡で中世以降の輸入陶磁器が多く出土する反面、土製煮炊具については現在のところ屋久島で2例みられるのみで屋久島以南の他の遺跡からの出土例は認められない<sup>3)</sup>。

冒頭で述べたが、中世前半(特に13・14世紀)の九州では煮炊具としては滑石製石鍋が盛行し、全国的にも流通する。鹿児島県内の滑石製石鍋の集成を行った栗林



第4図 切石遺跡での出土状況 (S=1/60)



第5図 鹿児島県における土製煮炊具出土遺跡

## 羽釜

番号	遺跡名	所在地	標高(m)	時期	備考	文献
1	加栗山	鹿児島市川上町	約170	15～16世紀	炉跡2から出土	1
2	鹿児島城二の丸	鹿児島市城山町5-1	約8			2
3	谷山弓場城跡	鹿児島市下福元町	約40	備前Ⅲ～Ⅴ期(鎌倉後期～江戸初頭)15～16か		3
4	上水流	金峰町花瀬	約5	中世後半～近世	滑石製石鍋	4
5	上ノ城	加世田市武田上ノ城	約50	瓦器質		5
6	市ノ原(第1地点)	市来町大里上ノ原	約40	中世後半期		6
7	城下	川内市百次町		中世前半・後半ともに出土	羽釜2(中世前・後)・湯釜1	7
8	成岡	川内市中福良町成岡	約20	溝2は12～13世紀・不明(近世?)	滑石製石鍋	8
9	西ノ平	川内市中福良町西ノ平	約25	須恵器に分類される	滑石製石鍋	8
10	鍛冶屋馬場	川内市平佐町	約4	中世後半期	井戸跡出土・滑石製石鍋(10世紀後半)	9
11	松尾城及び宗功寺跡	宮之城町虎居字松尾	約65	17～19世紀?		10・11
12	宮ノ前	薩摩町求名宮ノ前	約80	土師質 備前前期Ⅱ～Ⅲ頃か		12
13	馬場A	大口市平出水馬場	約210	12～16世紀の遺物出土 カマド		13
14	横川城	横川町中ノ字城山	約240	主に16世紀	滑石製石鍋	14
15	石峰	溝辺町麓石峰	約280	不明 竜泉・染付なども出土		15
16	森	始良町西餅田字森	約10	土師質(黄橙色)中世後半～近世	1点	16
17	小瀬戸	始良町西餅田小瀬戸	約10	不明 竜泉・薩摩なども出土	滑石製石鍋	17
18	南宮島	始良町西餅田南宮島字上田山野	約11	不明 竜泉なども出土	上下逆	18
19	萩原	始良町平松	約10	不明 蓮弁文青磁も出土	土釜と記載・滑石製石鍋	19
20	中原	始良町脇元	約10	中世後半～近世	9点	20
21	桑幡氏館跡	隼人町神宮	約14	中世後半		21
22	菩提	隼人町見次	約12	中世後半	畦状遺構・14号土坑	22
23	下伊倉城跡	東串良町新川西下伊倉	約4	不明 備前なども出土		23
24	岡	上屋久町一湊岡	約5	14世紀中頃～16世紀初頭 主に15世紀		24
25	火ノ上山	上屋久町宮之浦	約4	表層 19世紀初めの薩摩焼出土		25

## 鍋

番号	遺跡名	所在地	標高(m)	時期	備考	文献
1	長田	有明町原田字長田	約30	土鍋	2号土壇中玉緑白磁と共存	26

第1表 鹿児島県内の土製煮炊具

## 【表中文献】

- |   |  |
|---|--|
| 1 鹿児島県教育委員会 1981「加栗山遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(16)                 | 14 横川町教育委員会 1987「横川城跡」『横川町埋蔵文化財調査報告書』(1)                   |
| 2 鹿児島県教育委員会 1991「鹿児島城二之丸跡(遺構編)」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(55)         | 15 鹿児島県教育委員会 1980「石峰遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(12)              |
| 3 鹿児島市教育委員会 1992「谷山弓場城跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(11)                | 16 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003「森・白金原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(55) |
| 4 金峰町教育委員会 1998「上水流遺跡」『金峰町埋蔵文化財調査報告書』(9)                      | 17 鹿児島県教育委員会 1982「小瀬戸遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(19)             |
| 5 加世田市教育委員会 1980「上ノ城遺跡」『加世田市埋蔵文化財調査報告書』(2)                    | 18 始良町教育委員会 1977「南宮島遺跡」『始良町埋蔵文化財調査報告書』(1)                  |
| 6 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003「市ノ原遺跡(第1地点)」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(49) | 19 始良町教育委員会 1993「萩原Ⅲ遺跡」『始良町埋蔵文化財調査報告書』(5)                  |
| 7 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003「楠元・城下遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(57)     | 20 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003「中原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(54)    |
| 8 鹿児島県教育委員会 1983「成岡・西ノ平・上ノ原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(28)          | 21 隼人町教育委員会 2003「桑幡氏館跡 -第3次調査-」                            |
| 9 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002「鍛冶馬場遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財発掘センター調査報告書』(39)      | 22 隼人町教育委員会 1998「菩提遺跡」                                     |
| 10 宮之城町教育委員会 1995「松尾城及び宗功寺跡(2)」『宮之城町埋蔵文化財調査報告書』(5)            | 23 鹿児島県教育委員会 1989「下伊倉城跡・下伊倉遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(50)       |
| 11 宮之城町教育委員会 1997「松尾城及び宗功寺跡(3)」『宮之城町埋蔵文化財調査報告書』(7)            | 24 上屋久町教育委員会 1992「岡遺跡」『上屋久町埋蔵文化財調査報告書』(3)                  |
| 12 薩摩町教育委員会 2001「寺屋敷遺跡・通山遺跡・宮ノ前遺跡・犬木屋遺跡」『薩摩町埋蔵文化財調査報告書』(3)    | 25 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1996「火ノ上山遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(17)  |
| 13 大口市教育委員会 1996「馬場A遺跡」『大口市埋蔵文化財調査報告書』(15)                    | 26 有明町教育委員会 2003「長田遺跡」『有明町埋蔵文化財調査報告書』(2)                   |

工夫によれば、1994年現在で県内の滑石製石鍋の出土遺跡は83箇所、薩摩半島・黒島・硫黄島・喜界島に濃密に分布するという。今回筆者が土製煮炊具について収集できた範囲では26遺跡（うち1箇所は土製鍋）であったので、1994年時点と比較してもその圧倒的な割合の差が理解できるだろう。仮に現時点での数量的比較を行ったとすればさらにその割合の差は大きくなるであろうことは間違いない。なお、同時期であるかは明らかでないが、土製煮炊具と滑石製石鍋がともに出土する遺跡は6箇所（西ノ平・成岡・上水流・鍛冶屋馬場・小瀬戸・横川城）であった。ただし、このうち鍛冶屋馬場遺跡出土の石鍋は10世紀中頃とされる竪穴遺構から出土しているもので、時期は古代である。いずれにしても、この事実から土製煮炊具と滑石製石鍋が出土する遺跡は一致しないことが多いことがいえるであろう。

#### 4 中世の土製煮炊具はなぜ少ないのか

古代の土師器甕は、10世紀頃までは変遷がほぼ明らかになっている。しかしながら、中世までの変遷を追うことは資料の制約もあって現段階ではほぼ不可能であるといっても過言ではない。他地域での例では永田信一が平安京での状況を述べたところによると、「9世紀後半ないし10世紀初め以来、土師器の『甕』の口の下に鐮状の突出を作りつけたものがあらわれる。（中略）11世紀の煮炊き用具には良好な資料なし。11世紀末ないし12世紀初め以来、瓦器の羽釜が大量に出現する」という（佐原1996）。

また、中世の煮炊具の主流である瓦質土器の煮炊具が出現する背景としては、木村忠夫の北部九州についての研究がある（木村1990）。木村は、「12世紀からの大開発の結果として、人口が急増し、さらに燃料及び耕地の拡大による肥料の需要が拡大した。にもかかわらず、肥料と燃料の重要な供給源である草原が、平野の開発に伴って消滅した。このことにより、調理用の燃料を減らすための一つの方法として、食物の中で特に熱の通り難い穀物を粉状にして燃料効果をあげた。また、鎌倉時代中期から姿を現し、以後次第に中世土器の主流となる瓦質土器の煮炊具は、それまでの土器よりも丈夫で色も黒いため熱効率がよいので、燃料の節約になると考えられるので、このタイプの土器が中世後半に急速に普及するのではないか。」と述べている。

いずれも他地域である畿内と北部九州の例ではあるが、両者ともそれほど時期差なく12世紀頃に瓦質の土製羽釜の初現ないしは出現の要因があるとしている。おそらく、西日本の状況としてはある程度普遍的なものとしてとらえてよいものであろう。つまり、一般的には西日本の煮炊具は土製煮炊具が主流であったと考えられているということになる。ただし、九州では先述したよ

うに中世前半期には滑石製石鍋が主流であったと考えられる。

だが、滑石製石鍋が当時非常に高価なもので一般庶民が容易に入手できるものではなかったことは栗林も述べているところである。加えて中世の鉄製煮炊具も現在のところ県内では出土していない。今回行った集積の結果からも鹿児島県内では土製煮炊具が一般に流布していたとは積極的に考えにくい。では何を用いて煮炊きを行ったのだろうか？

従来から中世のみでなく、古代から鹿児島県・熊本県南部・宮崎県南部などの南九州地域ではカマド遺構や煮炊き施設の発見例が少ないことが指摘されている（杉井1999など）。また、中世になるとカマド遺構の発見例は増加するが石鍋以外の煮炊具の様相が明らかではなく、煮炊きをする施設が存在するのに対してあまり煮炊具が発見されないという奇妙な現象が起こっている。このような中で煮炊きの変遷を考えるのは非常に困難である。

ここで参考となるのは12世紀以降の東日本の様相である。杉井健氏によると「12世紀から14世紀前半までは、東日本において、甕や鍋などの土器で形作られた炊飯用具がほとんどみられない」ことから、他地域から搬入された鉄製鍋の使用・普及と関連つけられることが多いという（杉井1999）。ただし、14世紀以降には土製の鍋がつくられるということなので当該地域とは様相が若干異なる。県内では中世後半期に入っても土製煮炊具は希薄といっても過言ではない状況であるが、中世前半期から後半期への変化を考えるうえでは参考になるだろう。

また、朝岡康二によれば、「鍋・釜の廃品は一般に鉄材料として還元・再利用されたから遺品が残りにくく、鉄釜と羽釜型土器の相互関係を正確に知ることはできない。」という（朝岡1993）。例えば、鉄製煮炊具の九州での出土例は福岡県太宰府市大宰府史跡33次・福岡市那珂遺跡19次・佐賀県芦刈町小路遺跡（山本・山村1997）・大分県三光村深水邸埋納遺跡・大分県犬飼町表B遺跡での例（佐々木・村上・赤沼1990）以外はほとんどみられず、確かに鉄釜と羽釜型土器の相互関係を正確に知ることはできない。

なお、朝岡によると、再利用され、つくられるものとしては鉄製農具が最も多いようである。県内の鉄製農具が出土した遺跡には伊集院町山ノ脇遺跡（中世後半期～近世初頭）、川内市鍛冶屋馬場遺跡（古代～中世前半期）などがある。また、上述した薩摩町宮ノ前遺跡（中世前半期）では、小鍛冶によるものと考えられる110kgにもおよぶ鉄滓や鉄塊系遺物と、鉄の付着した土師器や中世須恵器が出土している。

ここで注目されるのが鹿児島の地域性である。上田耕によれば、「鹿児島は火山に由来する砂鉄が多くみられる地

域で、海辺ではたびたび黒々とした砂浜の光景をみることができ。知覧町小坂ノ上遺跡や金峰町白樫野遺跡では古代の遺物とともに鉄滓やふいごの羽口などが出土しており、平安時代頃から製鉄が始まっていたことが明らかになっている。」と述べられている(上田 2000)。

また、福田豊彦によると、「中世の鋳物師は、鍋・釜・打鉄・鋤・鍬・熟鉄などを持って全国を廻り、領家の保護によって、通行税免除の特権を主張し売買していた。」という(福田 1996)。全国といっても、どの程度廻っていたかは明らかでないが、鹿児島にも廻ってきていたであろうことは想像できる。

これらのことから古代以降の鹿児島では鉄製品についてもある程度は流通していたことが推察され、中世においても鉄製の鍋・釜が普及していた可能性も低いものではないと考えられる。

県内の土製煮炊具が少ない理由について、鉄製煮炊具はきわめて遺存度が低いものとされていることなどを含め考えると、むしろ土製煮炊具よりは鉄鍋・鉄釜の使用が一般に広く使用されていたにもかかわらず、再利用や腐食などによって残存していないだけである可能性も考慮したい。

## 5 まとめ

今回得られた成果からは、あらためて出土遺跡と資料の少なさを実感させることとなった。しかし、その中からおぼろげながら傾向がみえてきたことも事実である。これまでの結果をふまえ、県内の状況をみると次のようになる。

煮炊具の古代から中世への系譜を、容易にたどることは困難なようである。そのうえで述べるとすれば中世前半期に土製羽釜・土製鍋が出現する。時期は明確でないが、おおよそ11世紀から12世紀の頃であると考えたい。

中世前半期に限れば薩摩半島では滑石製石鍋の中に少量の土製羽釜が、大隅半島では滑石製羽釜の中に少量の土製鍋がみられる。このように、ある程度の地域性はあるが、その理由については明らかではない。このことは搬入品などのありかたなどを検討することによって明らかにできるかもしれない。

また上述したが、土製煮炊具が少ない理由として鉄鍋・鉄釜が普及していた可能性について今後さらに深く追究する必要がある。例えば、鉄製農具などへ再利用されている可能性も含め検討すべきであろう。古代以来鉄製産の痕跡が色濃く残る鹿児島県内では決して可能性は低いものではないと考える。

近世になると土製煮炊具がさらに減少する。また、小型の陶器製羽釜も出現するが、これもまた用途などが不明である。河口宏海によれば、近世にいたり鉄製品がそれまでより安価に供給されることで「土釜・土鍋(煮炊

具)は衰退し、焙烙形(炒り具)に変化する」(河口 1996)と述べられているが、鹿児島県内ではどのような変化をみせるのかは課題であろう。

## 6 おわりに

これまで中世に関していえば、煮炊具に関する研究はあまりみられなかった。

しかしながら、鉄鍋の出土がみられない地域の煮炊きの様相を考えるうえで今回の集成は参考となるのではないかと考える。

近世に関しても似たような状況で、煮炊具ではないがフライパン形のホウラク(ホウロク)が多く出土するという事実<sup>4)</sup>以外にはあまり食文化への認識は深くないようである。これらについては従来から指摘があったものとの実際にまとめられたものはなかった。

今回の集成はいわゆる土製の鍋・釜を集めたもので、これらをすべて煮炊具とするのには問題があるのかもしれない。また、この中には茶釜の模倣品とみられるものも多く含まれていることもあわせて注意する必要がある。

今後、稿を改めて滑石製石鍋の消長との関係や、鉄製煮炊具(芦屋釜なども含めたもの)とのかかわり、カマド遺構・堅穴建物などとの関係、集落遺跡ごとの性格付け、近世のホウラク(ホウロク)の検討など、煮炊具だけでなくそれに関わるものについて広く検討を行っていききたい。

## 【注】

- 1 ただし、他地域では、16~17世紀頃に土製煮炊具はほぼ消滅している場合が多いようであるので、県内においても近世を通じて存在するものでない可能性がある。  
また、中世と同様に、集落遺跡の調査事例は少ないので様相は不明である。
- 2 近世の堅穴遺構は1813年に堆積したとみられる火山灰に覆われていた。
- 3 上屋久町の岡遺跡と火ノ上山遺跡から1つずつ出土している。
- 4 フライパン形のホウラクは特に南部九州で出土するが、他地域ではあまり出土しないようである。乗岡実によれば、岡山の「棒状の把手をもつフライパン形土器が18世紀中葉以降にあり、焙烙としての報告例がある。」という(乗岡 2001)。フライパン形土器については、今後検討が必要であろう。

## 【参考文献・報告書】

- 朝岡康二 1993 『ものと人間の文化史 72 鍋・釜』 法政大学出版局
- 浅野晴樹 1991 「東国における中世在地系土器について―主に関東を中心として―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集 国立歴史民俗博物館
- 伊藤裕偉 1996 「伊勢の中世煮炊用土器から東海を見る」第4回東海考古学フォーラム『鍋と釜 そのデザイン』 考古学フォーラム
- 今村敏照・中村守男 1994 「大口市馬場A・辻町2遺跡におけるカマド跡 ―鹿児島県の中・近世カマド概観―」『大河』第5号 大河同人

- 上田耕 2000 「鹿児島島の製鉄遺跡と鉄生産の様相」『製鉄史論文集』たたら研究会 編
- 宇野隆夫 2001 『荘園の考古学』青木書店
- 江戸遺跡研究会 編 2001 『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 大分県犬飼町教育委員会 1990 『犬飼地区遺跡群発掘調査概要Ⅲ』
- 大西智和ほか 1994 『鹿児島大学構内遺跡郡元団地L-11・12 区鹿児島大学稲森会館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 小野正敏 1997 『戦国城下町の考古学 一乗谷からメッセージ』講談社文庫メチエ
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003 『山ノ脇遺跡・石坂遺跡・西原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(58)
- 鹿児島市教育委員会 1992 『造土館・演武館跡』鹿児島市埋蔵文化財調査報告書(13)
- 1998 『祇園之洲砲台跡』鹿児島市埋蔵文化財調査報告書(23)
- 2000 『一之宮遺跡B地点』鹿児島市埋蔵文化財調査報告書(26)
- 加藤緑 1982 「室町時代の鑄付土器(羽釜)」『博物館ノート』No.7 大田区立郷土館
- 金子健一 2000 「土師質煮炊具からみた中世の東海と東国」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第8輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 河口宏海 1996 「中世日本の土釜について」『考古学ジャーナル』409 ニューサイエンス社
- 北村和宏 1996 「尾張平野における鎌倉・室町時代の煮炊具の編年」『年報 平成7年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 木戸雅寿 1993 「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究』IX 日本中世土器研究会
- 木村忠夫 1990 「中世粉食文化の背景」『古代中世史論集』九州大学国史学研究室編 吉川弘文館
- 栗林文夫 1994 「滑石製石鍋出土遺跡 一鹿児島県一」『大河』第5号 大河同人
- 1996 「鹿児島県出土の備前焼・常滑焼・東播系須恵器について」『大河』第6号 大河同人
- 古代学協会編 2003 「特輯 11～15世紀における南九州の歴史的展開 一万之瀬川下流域に見る交易・支配・宗教一」『古代文化』Vol.55-2・3
- 佐藤亜星 2001 「南九州における瓦質土器の特質 一鹿児島県出土資料を通じて一」『鹿児島考古』第35号 鹿児島県考古学会
- 佐々木稔・村上久和・赤沼英男 1990 「大分県下の中世遺構から出土した鉄鍋の金属学的分析」『古文化叢書』第23集 九州古文化研究会
- 佐原 真 1996 『食の考古学』東京大学出版会
- 杉井 健 1999 「炊飯様式からみた東西日本の地域性」『古代史の論点』6 日本人の起源と地域性 小学館
- 鋤柄俊夫 1997 「土製煮炊具における中世食文化の特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 [共同研究] 中世食文化の基礎的研究 第一法規
- 川内市教育委員会 1985 『薩摩国分寺史跡整備事業報告書』
- 谷口俊治 1989 「豊前地域の中世雑器一山陽道西部地域の設定に向けて一」『研究紀要』第3号 財団法人北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室
- 津田芳男 1990 「中世煮炊具に関する若干の覚書一千葉県を中心にして一」『年報No.4-昭和63年度一』(財)長生郡市文化財センター
- 坪根伸也・塩地潤一 2001 「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会
- 時濱奈歩 2002 「岡山県における中世前半期の煮炊具の様相」『環瀬戸内海の様相一平井勝氏追悼論文集一』古代古備研究会
- 徳永貞紹 1990 「肥前における中世後期の在土器」『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会
- 中村直子ほか 1995 『郡元団地O-7区(福利厚生施設建設地)における発掘調査報告』鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報IX・X 平成5・6年度 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 野末浩之 1988 「愛知県内における11～13世紀の煮炊形態」『研究紀要』7 愛知県陶磁資料館
- 乗岡 実 2001 「岡山」第3回四国徳島城下町研究会 発表要旨・資料集『四国と周辺の土器一焙烙の生産と流通一』徳島大学総合科学部歴史研究室・関西近世考古学研究会・考古フォーラムくらもと
- 福田豊彦 1996 「文献からみた鉄の生産と流通」『季刊考古学』第57号 雄山閣
- 本田道輝 1987 『鹿児島大学郡元団地内遺跡(B-D・9, 10地点)一鹿児島大学農学部温室改築及び実験温室、網室等新設に伴う試掘調査報告書一』鹿児島大学農学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 松永幸男・金子千穂枝・砂田光紀 1989 『情報処理センター新営通信設備工事に伴う立合調査出土遺物の紹介』鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報IV 昭和63年度 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 山田康弘ほか 1994 「諏訪之瀬島切石遺跡」『熊本大学文学部考古学研究室研究報告』第1集 熊本大学文学部考古学研究室
- 山村信榮 1990 「太宰府出土の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会
- 山本信夫・山村信榮 1997 「中世食器の地域性 10-九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 [共同研究] 中世食文化の基礎的研究 第一法規
- 山本信夫・狭川真一 1987 「鉢ノ浦遺跡」『仏教芸術』174号
- 吉岡康暢 1997 「研究活動の記録と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 [共同研究] 中世食文化の基礎的研究 第一法規

